# 清正公霊と大将軍神社

佐藤末喜

明治四十四年版「神社明細牒」によると、大将軍神社は寿永年間（一一八二～三）に加賀の国から勧請されたという。その時の大将軍神社の祭神は「保食神・伊邪那岐神・岩長姫神」の三柱であったが、明治初期の神社合併策により十七柱になったといわれている。その中に加藤清正公霊が二柱含まれている。本稿は本国を遠く離れた肥後領飛び地・谷村に、旧肥後藩主加藤清正公の霊を祀る加藤社が二つもあったことの由縁を考察する試みである。

## （一）大将軍神社の祭神

挟間町誌には「大将軍神社、通称大将軍様・保食神社。祭神、虚空蔵菩薩・勢至菩薩・毘沙門天・保食大神・伊邪那岐大神・岩永姫神他十四柱の神々」とあり、合計二十柱を祭神と数えている。一方「挟間町の文化財～谷村の文化財」には「三社のほかに阿須波神・波比岐神・加藤清正公・崇徳天皇・大歳神・大山津見神・菅原神など十七神が祭られている」と書いていて祭神は十七柱であるとしている。祭神の数はどれが正しいのであろうか。

原典とすべき明治四十一四年版「神社明細牒」を見てみよう。

『大分縣管下豊後国大分郡篠原村松原

村社　松原神社

一　祭神　保食神　二柱　一　同　武岩立神
一　同　伊邪那岐神　一　同　櫛稲田姫命
一　同　岩永姫神　一　同　大山津見命
一　同　阿須波神波比岐神　一　同　天水分神
一　同　市杵嶋姫神　一　同　大国魂命
一　同　素盞嗚命　二柱　一　同　菅原道真公
一　同　加藤清正公　二柱　一　同　稲倉魂神
一　同　崇徳天皇
一　同　大歳神
一　由緒

右保食神伊邪那岐神岩永姫神都合三神ハ元ト加賀国篠原村ニ鎮座スル三社神ニテ寿永年間源平大争乱ニ依リ平家ノ余族北国ニ敗走スルノトキ同社ヘ奉仕スル社司加藤兵部大夫ナル者思慮スルニ斯ク大乱騒擾ノ折柄安閑トシテ行イランモ災害ノ波及ヲ恐レ即移住、、三社神ヲ守護シ篠原ヲ陰ニ出立豊後国仝東郡姫島ニ着居スル内源家益萬国ニ出兵シ遂ニ長州檀ノ浦開戦ト聞キ談島ニ住居致居ルモ心ナラストテ右姫島ヲ立去テ同国洗ノ里ニ移居スコレ兵部大夫安着シテ静止ノ時ヲ待ット云フヲ以テ其所ヲ時松ト号ス當今大分郡時松村之レナリ然ルニ或夜守護シ祭ル三社神兵部大夫ニ託シテ曰ク之レヨリ南位ニ當リ清ナル高山アリ此山嶺ニ遷座致度云々霊夢ヲ蒙リ夢覚テ神勅ノ現霊ナルヲ感戴シ直ニ同山ニ遷置又故ニ古郷ノ例ヲ引テ爾後同地ヲ篠原村小倉山三社神ト唱呼シ確乎タル由緒等有之ノ処正徳年間火災ニ罹リ由緒記録等悉ク焼失ス故ニ勧請年月日不詳旨右古老伝聞

ノ口碑ニ存スル侭ヲ書最モ談社ノ神徳口上兵部大夫霊碑等信仰スル頗ル繁盛ナルハ衆庶ノ知ル所ナリ依テ明治六年月日不詳村社ニ列セラレ又阿須波神波比岐神市杵嶋姫命素盞嗚命加藤清正公都合五神ハ元ト篠原村字鶴村社地神社鎮座崇徳天皇大歳神武岩立神素盞嗚命櫛稲田姫命大山津見命天水分神大国主命保食神加藤清正公霊菅原道真公稲倉魂神都合拾貳神ハ元ト小野村字堀ノ内村社白峰神社鎮座ニテ過ル明治十二年三月十三日當松原神社へ合併出願ノ処仝月十七日願ノ通御允可然レ共合併遷座式ハ末執行セス』とある。

これによれば大将軍神社の祭神は、保食神・伊邪那岐神・岩永姫神・阿須波神・波比岐神・市杵嶋姫神・素盞嗚命・加藤清正公霊・崇徳天皇・大歳神・武岩立神・櫛稲田姫命・大山津見命・天水分神・大国主命・菅原道真公・稲倉魂神の十七柱となる。

大将軍神社の祭神が当初の三柱から現在の十七柱～二十柱になったのには、明治維新後の神社合併政策が大きく関与している。中世から存続してきた三柱のほかの祭神は、どこの神社にあったものかを調べてみる。

明治八年神社合併願（谷村の部）の該当部分を下記に記すと

（一）篠原村

| | 字名 | 神社名 | 祭神 |
|---|---|---|---|
| ① | 松原 | 厳島社 | 市杵嶋姫命 |
| ② | 〃 | 天満社 | 菅原道真公 |
| ③ | 〃 | 白峰社 | 崇徳天皇 |
| ④ | 鶴 | 八坂社 | 素盞嗚命 |
| ⑤ | 大原 | 加藤社 | 加藤清正公霊 |
| ⑥ | 鶴 | 地神社 | 垣安命 |

**右六社　字松原　保食社ヱ合併**

（二）小野村

| | | | |
|---|---|---|---|
| ① | 迫 | 下野社 | 武岩立神 |
| ② | 宮原 | 八坂社 | 素盞嗚命・櫛稲田姫命 |
| ③ | 大向 | 山神社 | 大山津見命 |
| ④ | 谷口 | 谷口社 | 天水分神 |
| ⑤ | 東小野 | 侠井社 | 大国主命 |
| ⑥ | 片山 | 鹿倉社 | 保食命 |
| ⑦ | 東ノ尾 | 歳神社 | 大年神 |
| ⑧ | 堀ノ内 | 加藤社 | 加藤清正公霊 |
| ⑨ | 東小野 | 天満社 | 菅原道真公 |
| ⑩ | 堂山 | 稲荷社 | 保食神（稲倉魂神カ） |
| ⑪ | 西平 | 山神社 | 大山津見命 |

**右拾壱社　字堀ノ内　白峰社ヱ合併**

まず（一）篠原村にあった六社が松原社（大将軍神社）に合併され、明治八年合併時の祭神は九柱となった。次いで（二）小野村にあった十一社・十二柱が堀之内・白峰社に合併して、白峰社の祭神は十三柱となったが、もともと白峰社の祭神は崇徳天皇であるから、崇徳天皇は二柱で堀之内・白峰社の祭神は十二柱である。こののち、白峰社は明治十二年に松原神社（大将軍神社）に合併されているがこの時の祭神は九柱に十二柱を加えた合計二十一柱となるが、崇徳

天皇（二柱）・加藤清正公霊（二柱）・菅原道真公（二柱）・大山津見命（二柱）・素盞嗚命（二柱）・保食神（三柱）を一つと勘定すれば十五柱となる。

ここで篠原村大字鶴の地神である垣安命は土地の神であるが、これが阿須波神（土地の神）、波比岐神（屋敷の内外を守る神）の二つの神に分かれ祭神とされた。また大字堂山の稲荷社の保食神は同じ穀物の神である稲倉魂神と呼ばれたのではないかと考えられる。以上を整理すると保食神は二柱となり、合計の祭神は十七となり「神社明細牒」と付合する。

全国神社名鑒には「大将軍神社、祭神保食神他十六柱、例祭一月十三日、由緒古来当地の氏神で大正十三年十一月郷社に列した」とあり、祭神の数は十七柱と登録されている。

挟間町誌は虚空蔵菩薩・勢至菩薩・毘沙門天の三つも祭神としているが、これらは仏像であり除外するのが当然であろう。明治三年の神仏分離令が出るまでは、大将軍神社と正光寺がいっしょに祭られた神仏混淆であった。分離されて正光寺は直入町に移されたが、虚空蔵菩薩以下三像は正光寺の本尊であった。挟間町誌の記述は誤りである。

**閑話休題**

「大将軍」を「だいじょうごん」と読むのは国語的にはかなり無理がある。京都から加賀を経て篠原に勧請されたのは「たいしょうぐん神社」もしくは「だいしょうぐん神社」とフリガナされている。「大将軍」を九州では「だいじょうごん」と読まれることが多いとはよく言われることである。臼杵市末広と乙見日平にあるのは「だいじょうごん神社」といい、日向市塩見奥野にある神社も同じである。一方延岡市無鹿町二丁目や都城市高木町赤坂、出水市中央町にあるのは「だいしょうぐん神社」と言っておりマチマチである。九州大学の服部英雄教授の「安岐川下流域の歴史と地名」の中に、ダイジョウゴン（大将軍）池という記述がある。広く調べれば地名として残っているものがまだあるのかもしれないが、今は「だいじょうごん」といえば篠原が代名詞になっている。我々の周辺で「だいじょうごん」の呼び名がこれほど人口に膾炙され、人々の生活の一部になってきたのは珍しいことである。

**（二）豊後国内の肥後藩領**

加藤清正は天正十四年（一五八六）から秀吉の九州平定に従い、肥後国領主となった佐々成政が失政により改易されると、これに代わって肥後北半国十九万五千石を与えられ、隈本城に入り、のちの天正十九年（一五九一）頃よりこれに改修を加え熊本城とした。秀吉が死んだあと関ヶ原の戦いの戦功により、小西行長の旧領を獲得し肥後国の大半を領有した。慶長六年（一六〇一）清正は天草郡と豊後国三郡との替地を家康に許され、ここに豊後国内の肥後領飛び地が確定した。清正の狙いは参勤交代の便を図るうえで鶴崎湊からの海路の利用にあったが、一説には大阪城にいる秀頼の火急の場合の対応も考慮に入れていたらしい。

肥後領飛び地の村々は

大分郡〜野津原・胡麻鶴・入藏・吉熊・辻原・岡藏・矢野原・原・酒野・筒口・五ケ瀬・大龍・篠原・谷・田能小野・鶴崎・寺司・国宗・堂園・関門・常行・南・鵜猟河瀬・上徳丸・下徳丸・鶴・迫・志・小中島・門前・嶺・冬田・竹中・岩上・伊与床・高城・中野・中無礼・弓立　計三十九カ村

海部郡〜大西・角子原・北村・横田・政所浜・北下城原・市・木田・上野・細・木佐上・神崎・大平・大志生木・小志生木・古宮・関・白木・四浦・一尺屋　計二十二カ村

直入郡〜久住・白丹　計二村　総計六十三か村

加藤清正時代の村方支配組織は、各郡に郷組制を敷き大庄屋を任命した。野津原郷は野津原と谷の二組であった。寛永九年（一六三二）加藤忠広の改易により肥後に入封した細川忠利は、翌十年より地方制度の改革を行い、郷組制度に変えて手永制度を採り入れ、野津原手永・谷手永と呼ばれることになった。野津原手永は十四カ村、三八九四石、谷手永は十二カ村、三八〇〇石であった。各手永には惣庄屋が任命され、その下の各村には小庄屋を置き、村方の支配に当たらせた。享和三年（一八〇三）以降、谷手永は野津原手永に統合された。

清正によって拓かれた肥後街道は、肥後国熊本から豊後国鶴崎を結ぶ全長約一二四km（三十一里）の街道である。細川氏時代の旅程をみると、第一日目は肥後大津で一泊。第二日目は阿蘇山麓の内牧、第三日目は産山村を経て豊後国に入り久住で泊。第四日目は今市宿で小休止のあと野津原宿泊り。五日目は野津原から平坦な道を下って鶴崎着という日程であった。

本国を遠く離れた、谷手永の篠原、小野の二村に加藤清正公霊を祀る神社（加藤社）があったことは興味深いことである。また肥後街道の宿場である野津原に鎮座する野津原神社（加藤神社）には、祭神の加藤清正公霊を祀る「清正公祭り」が毎年八月二十四日に開催され、今日まで続いている。ここで野津原神社について「全国神社名鑒」の記述を見てみよう。

「祭神素盞嗚命、加藤清正公霊他十一柱、例祭八月二十四日、由緒―素盞嗚命は建久年中大友能直が京都祇園社より当村上平野に勧請した。加藤清正公霊は当村日蓮宗法護寺に鎮座し野津郷の宗廟と称した。明治四年両神共に現社地に転祀して現社名に改称、同六年郷社に列した」

このように豊後の飛び地にまで広まっている「清正公信仰」はどのようにして成立したのであろうか。

### （三）清正公信仰

加藤清正が信仰の対象となった背景として以下の二説がある。

① 圭室諦成に代表される説で、清正が「祟り神」となり、その鎮魂の為に祭祀が行われたとするものである。（主著・清正公さん信仰）

② 池上尊義の「肥後本妙寺と清正公信仰の成立」に代表される説で、清正は母親の影響から幼少の頃より熱心な法華宗の信者で

あり、菩提寺である本妙寺を中心とする六条門流（京都・本圀寺）の民衆への布教の反映や、藩主時代の新田開発や治水事業などの功績によって「顕彰神」として民衆から崇敬されたとするものである

この二説は歴史学会においてなおいずれが定説かは定まっていない。

世界大百科事典の解説によれば

「清正公信仰〜肥後熊本の領主で熱心な法華の信者であった加藤清正を「清正公さん」と奉称し、所願成就を祈る信仰。この信仰は地域的には清正の旧領で、その廟所のある熊本を中心に九州一円に広がる宗派を超越した庶民信仰としてみられ、教団的には日蓮宗旧六条門流寺院を中心に全国的に分布している。この信仰の成立過程には、清正が肥後にはじめて法華信仰を導入した人物として教団的に尊崇されたこと、治水、干拓などにしめされた治世の名君として敬慕されたこと、さらに家系断絶に対する庶民的同情等がその背景にあり、同時にその廟所である本妙寺が清正の創建以来祈祷寺としての性格を維持していたことによる。」と両説を折衷をしたようになっているが、筆者には十分首肯できる説明である。

清正の死後五十年にして既に清正を偲ぶ祭礼があったと伝えられている。また肥後藩の史料に、「清正公の百年忌には足軽十数名を派遣した」という記録が残されている。肥後藩を挙げての祭礼が、清正の没後一世紀を経ないうちに行われていたのは驚きである。

清正の治水事業

清正公信仰の核をなす治世の名君としての治水、干拓事業を見てみよう。

清正は得意とする治水等の土木技術による生産量の増強を推し進めた。これらは主に農閑期に進められ、男女を問わず徴用されたがこれは一種の公共工事であり、給金も支払われたためみんな喜んで協力したという。＊白川・坪井川大改修、＊緑川の鵜瀬堰、＊球磨川の遥拝堰、＊菊池川の改修、これらにより広大な穀倉地帯が生まれた。また熊本平野・八代平野・玉名平野への干拓と堤防の整備により、海岸に近い地域にも広大な畑作地域が生まれた。当時としては先進的な測量、土木技術の賜物であり、今日の農業用水確保はこの時代の遺構に頼る面が少なくない。開墾の面積は約一万五千町歩、生産米は約二十一万石にもなる。領民の授かった恩恵は数え上げればきりがない。

令和元年十月十五日版、ＮＨＫ　熊本　ｎｅｗｓ・ｗｅｂ　に次の記事が載っている。

「加藤清正が築いたものも含まれる菊池市で江戸時代に造られた用水路が、農業の発展に貢献した灌漑施設を登録する「世界灌漑施設遺産」に選ばれました。「世界灌漑施設遺産」はインドに本部がある委員会が毎年選んでいるもので、今年度は日本から「菊池の灌漑用水群」などが登録されました。「菊池の灌漑用水群」は菊池川の水を水田に引くために江戸時代に造られた四つの用水路からなっています。このうちの江戸時代初期の「菊池井手」は加藤清正が築造

しました。」

このニュースは、清正の名君ぶりを四百年後の今日改めて世に知らしめた。

細川氏第三世忠利の態度

清正公信仰の端緒を開いたのは、細川忠利の清正公に礼を尽くした態度、行動にあった。

細川氏は豊前小倉で三十五万九千石だったが、加藤家改易後の肥後一国と豊後の一部を併せ五十二万石の大大名となった。肥後における初代忠利は、小倉からの道中、行列の先頭に清正公の霊牌をかかげて熊本に入ったといわれる。また忠利は初めて熊本城に登ったとき、石垣の上にすわり、清正公廟を遥拝して、「あなたのお城を預からせて頂きます」と言ったといわれている。忠利のこの芸の細かさは肥後の人心を得るためだったが、その細心さこそが明治まで持ちこたえた所以であろう。清正の菩提寺・本妙寺には寺領四〇〇石を給し崇敬した。

肥後国の領民にとって、後任の殿様が清正公を高く評価し、厚く敬ったことは絶大なる影響を与えたに違いない。おそらくその雰囲気が伝播して、豊後の飛び地野津原手永・谷手永に加藤社を祀らせたのであろう。

余禄・司馬遼太郎の清正観

司馬遼太郎は肥後は難治の国であるといい、佐々成政が失敗した後に入部した清正と肥後人の関係を独自の観点から述べている。以下は「この国のかたち」からの引用である。

『肥後の政治史は劇的である。このような肥後人の鬱憤が、ただ一人の加藤清正の登場によって、カタルシスをおこさせた。このことは、清正の政治的人格の効用という以上に、肥後人の向日性として考えていい。「ムシャ（武者）がよか」という古い熊本弁は、カッコイイという意味として使われてきた。男に対してだけでなく、女ぶりが一段と上がるカッコウに対してもつかわれる。〝ムシャがよか〟というのは、単に武勇があっていさぎよい、というだけでなく、その人物に表裏がなく、正直で陰険な政略を用いず、また晦渋でない、ということも重要な条件にちがいない。まさに清正こそそういう存在だった。

清正は、佐々成政のあと、肥後半国二十五万石をもらうまでは、三千石ほどの小身にすぎなかった。かれは肥後に入ると、肥後人や佐々の遺臣を大胆に採用した。このことが肥後人の痛みをまずやわらげた。

土木と財政に長じていたことも、かれの印象を大きくした。ひろく農業土木を興して、灌漑面積を大きくし、百姓の次男・三男のために耕地をつくった。

このことは肥後半国という広域行政でこそできることで、五十二国人の割拠時代という中世ではやろうにも不可能だった。農民たちはむかしを懐かしまなくなった。

さらに、清正がやった奇跡は、熊本城という、肥後人がみたこと

もない巨大な城郭を出現させたことである。堂々たる外観と、日本一の防御力をもったこの城ができたときほど、肥後人は清正に〝ムシャがよか〟を感じたことはなかったろう。

戦前、旅廻りの劇団が熊本で芝居をするとき、清正劇さえやれば必ずあたるとされた。清正劇をやらないときは、とりあえず烏帽子の兜に片鎌槍をかかえた人物を舞台に登場させ、「さしたる用はなけれども、あらわれ出でたる加藤清正」と、大見得を切らせてひっこませたといわれる。

清正の治世は二十余年にすぎなかったが、ながく肥後人の心に風を通しつづけたと言えるのではないか。

つぎの世の家康は、清正を腫物にでもさわるように大切にあつかった。かれは清正に肥後一国をあたえ、さらに豊後の一部を加えて五十二万石の大身代にした。さらには婚姻を通じて清正をとりこもうとした。ただし、清正が死に、その子の代になると、幕府は加藤家をつぶした。』

**おわりに**

生前の徳行を称賛して、死後その人を神として祀る風潮は南北朝以降に始まった。例えば秀吉の豊国大明神や家康の東照大権現のように。清正の場合は、個人的現世利益だけでなく、水利・土木・農業の神様として広く祀られている。このことから清正公信仰の本質は宗派を超越した、民衆の清正公に対するただひたすらの敬愛の念であり、しかも至極当然に発生したのであろうと考えられている。